

【調査報告】

中国人日本語教師が持つ
日本語教育における日本・日本文化に関する意識
—新人教師と経験教師の比較より—

Chinese Japanese-Language Teachers' Beliefs

Concerning Japan and Japanese Culture in Japanese-Language Education:
Based on a Comparison of Novice Teachers and Experienced Teachers

八田直美 国際交流基金

HATTA, Naomi The Japan Foundation

小澤伊久美 国際基督教大学

OZAWA, Ikumi International Christian University

坪根由香里 大阪観光大学

TSUBONE, Yukari Osaka University of Tourism

嶽肩志江 横浜国立大学・神奈川県立国際言語文化アカデミア

TAKEGATA, Yukie

Yokohama National University · Kanagawa Prefectural Institute of Language and Culture Studies

【キーワード】 中国人日本語教師, ビリーフ, PAC 分析, 日本文化, 異文化コミュニケーション能力

1. はじめに

国別で見た調査によると、中国は、国内の学習者数、日本への留学生数とも世界で最も多い⁽¹⁾。中国国内では、日本語を教えている高等教育機関のうち約 6 割に日本語母語話者教師（以下、NT）がおり（国際交流基金 2013），中国人教師（以下、CT）と NT とのチーム・ティーチングが広く行われている。また、日本国内では CT から日本語教育を受けた留学生を NT が教える場面が多いことから、CT のビリーフ⁽²⁾ とその背景を把握することの意義は大きいと考えられる。

また、中国は日本語教育の歴史も長いため、教師の経験年数にも幅があり、そこにビリーフの違いがあることも予想される。そこで筆者らは CT の経験の長さにも着目し、新人 CT（日本語教育歴 1 年以下）5 名と経験 CT（同 15 年以上）5 名を対象に、CT のビリーフとその背景を明らかにする一連の研究に取り組んできた。

その中で、調査協力者である CT10 名のうち 9 名が、日本語教育の場で日本や日本文化を取り上げることに言及していることが判明したが、その詳細までは分析してこなかった。そこで、本稿では CT がどのような意義や必要性から日本や日本文化に言及し、授業の中ではどのように扱っているのか、また、新人 CT と経験 CT の意識にはどのような共通点や相違点があるかを明らかにする。その上で、本研究から得られた知見が NT との協働や教師研修に与える示唆についても論じたい。

2. 先行研究

2.1. 筆者らの CT を対象とした研究

具体的な方法は 3 章で述べるが、筆者らは前述の通り CT10 名を対象にしたインタビュー調査を実施しており、そのデータを複数の観点から分析して、ビリーフやその背景を考察してきた。

まず、坪根他（2014）は、経験 CT のデータのみ

を分析対象とし、5名全員が何らかの形で言及した「対学習者」に関するビリーフに焦点を当てて分析した。結論として、調査に協力した経験 CT は、(1) ほめたり励ましたりし、思いやりを持って学習者の立場に立ち、質問しやすい雰囲気作りをしようとしている、(2) 教師と学習者が対等で共に学び合う授業を目指している、ということが明らかになった。

一方、坪根他 (2015a) は、新人 CT に焦点を当て、共通して見られるビリーフは、(1) いい授業のための様々な工夫を行っている、(2) 学習者が広い視野を持ち、中国と日本の架け橋になることを期待している、(3) 学習者のモデルとして、教師の発音を重視している、などであることを指摘した。また、(2) の背景には、希望に反して日本語学科に入学した学習者がいること、中国国内のマスコミ報道に対する懸念があることがわかった。

しかしながら、坪根他 (2014) と坪根他 (2015a) は同じ観点で分析していないため厳密な意味では両者の比較はできない。そこで、坪根他 (2015b) では、新人 CT と経験 CT のデータを同じ観点から全体的に比較・分析し、共通のビリーフとして、(1) 学習者を励ます、学習者の立場に立つ、公平・公正といった「学習者への愛情・配慮」、(2) 流暢に正しく話せる「教師の日本語の会話力」、(3) 様々な手段で面白い授業をするなど「学習者に興味を持たせる教え方」、(4) 「リラックスした雰囲気の教室運営」などへの意識があることを明らかにした。一方、相違点として、新人 CT に多く見られた特徴は、(1) きれいな発音、(2) 中国語の能力、中国についての知識、(3) 日本留学経験の必要性、(4) 中国と日本の関係への意識、両国の相互理解の必要性、経験 CT は、(1) 専門知識、言語知識の必要性、(2) 教室外での個別指導や相談、(3) 自分の能力を高めるための継続学習、(4) 研究の必要性などの意識が指摘された。教え方に関しては、経験 CT は学習者主体や学習者に考えさせる、または話させること、実践的な日本語、課題解決等を重要視しているが、新人 CT

は、1名を除く全員に、暗誦、日中対照、翻訳等への強い意識が見られた。このような相違点の要因として、経験 CT は経験の長さ、大学院の担当経験の影響、新人 CT は日本語教育が専門ではない4名は自分が習ったように教えていることが考えられるとしている。

これらの分析において、新人 CT は、いい授業の工夫の一つとして日本文化を紹介したり、学習者に広い視野を持って中国と日本の両国の架け橋になってほしいと願ったり、教師は日本留学の経験があることが望ましいと考えたりするなど、日本や日本文化への強い意識があることがはっきりとわかった。しかし、それらが具体的に何を指し、日本語授業の中でどのように扱われるのかは、筆者らの先行研究では明らかになっていない。一方、経験 CT は、日本や日本文化への意識が新人 CT ほど顕著には表れていないように見えるが、実践的な日本語能力の育成を目指していることを考えると、そこには日本や日本文化への意識が関わっている可能性がある。しかし、この点も、筆者らの先行研究では分析の対象としてこななかったため推測の域を出ない。したがって、この 10 名の CT の日本や日本文化への意識について論じるためには、彼らのデータをこの観点から改めて分析する必要がある。

2.2. 中国の大学の日本語教育における日本や日本文化の扱い

CT の意識を分析するにあたり、本節では、まず中国の大学の日本語教育では、日本や日本文化をどのように扱うものだとされているのか見てみる。

中国の大学における教育目標や内容は、日本の文部科学省に相当する中国教育部が制定する『教学大綱』に規定されている⁽³⁾。葛 (2012, 2015a) は、日本語専攻課程の『教学大綱』とその元になる指針を示した教育部文書を分析・考察した⁽⁴⁾。葛 (2012, 2015a) によると、まず、『教学大綱』が準拠する教育部文書では、外国語教育の目的として、複合型外

国語人材の育成が提起されている。複合型外国語人材とは、確かな外国語能力を持ち、その外国語を使って活動する人材のことで、外国語能力だけでなく、外国語専攻知識および複合的専攻知識の他に関連学問分野の幅広い知識、総合的な能力、高い素質（資質）を備えていることを特徴としている。また、それを受けた『教育大綱』では、専攻課程の日本語教育の目的を異文化コミュニケーション能力の育成とし、日本の社会文化として、地理、歴史、政治、経済、風俗、宗教などの基本知識を身につけるべきとしていることが指摘されている。その教育方法は、中国の伝統的な教育観から教師による講義が想定されていると読みとれるが、具体的な内容や方法までは言及されていないという。

では、教材や教育現場ではこれらの方針がどのように取り入れられているのであろうか。周（2012）は、『教育大綱』に記載された異文化コミュニケーション能力あるいは社会文化能力を、バイラム（Byram1997）の主張に代表されるヨーロッパ型の異文化間コミュニケーション能力と解釈し、中国で作成され、大学で多く使用されている日本語教科書の内容に異文化間コミュニケーション能力の要素がどのくらい含まれているか、分析を試みた。バイラムは、異文化間コミュニケーション能力の構成要素を態度、知識など5つにまとめている⁽⁵⁾が、周（2012）の分析によると、日本語教科書5冊には、それぞれ異文化間コミュニケーション能力の要素が全て含まれていることが確認できたという。しかし、実際にこうした教科書の内容が学習者の能力育成につながるかどうかは、授業を行う教師の意識や教え方によるところが大きいと思われる。教科書分析だけでなく、教師の意識も探る必要性があろう。

譚（2006）は、日本や日本文化に関するCTの意識と教育の現状を把握し、改善方法を探るために、大学の専攻課程の「日本事情」という科目についての質問紙調査とインタビュー、授業観察を実施した。その結果、CTには、「日本人の考え方や意識」、「歴

史」、「生活習慣」などに重点を置いて教えたいという考えがあるが、実際には教科書にあるものを教え、ないものは教えていないこと、使用している教科書には、「日本人の考え方・意識」に関する記載はほとんどないということが明らかになった⁽⁶⁾。また、写真だけでなく、歌や動画など最近のリソースを使って教えたいと思っているが、CT自身の日本経験はあまり多くなく、リソース等の情報も不足しているといった現状や、一方的な講義だけでなく、学習者が直接観察したり体験したりするといった授業をしたいという希望が報告されている。

また、葛（2015b）では、「日本概況」（日本語では「日本事情」）のサンプル授業を調査し、日本文化教育の現場の特徴と課題を指摘している。ある地方大学で行われたCTとNTの授業を1回分ずつ比較・分析したところ、どちらの授業でも写真やビデオなどのリソースが使われていたが、教師の講義によって、東京のインフラや日本の舞踊についての知識が伝授されていた。この2つの授業内容に見られる日本文化観は、「所産・知識としての文化」（佐々木2002）であると葛（2015b）は述べている。「所産・知識としての文化」とは、特定の文化の生活習慣や伝統文化、大衆文化などを指し、静態的で確固たるものとしてして講義形式で一方的に伝授されることが多い。二つの授業のいずれにおいても、リソースは説明のための素材として使われ、教師は一斉授業でも学習者による課題発表の活動でも固定的な日本文化を伝えていたという。また、NTの授業では、教師が媒介語としての中国語が使用できず、また、学習者の理解語彙水準がわからないために学習者の理解に支障が起こっても対応しにくい場面があつたことを受け、葛は文化についての専門的な概念が理解できるNTと、学習者が深く理解できるよう中国語で支援できるCTとの協働を提案している。学習者による課題発表についても、テーマ選定の自由度、教師の介入の仕方、発表者の学習意欲、教師と学習者あるいは学習者間のインターアクションの

度合いによって完成度が大きく左右されていたと指摘し、文化の捉え方だけでなく、教育手法や文化教育の目的の再考も喫緊の課題であるとした。

しかし、葛 (2015b) も指摘するように、これはあくまでも 2 つの授業実践について言えることであり、一般化させることは難しい。それに加えて、譚 (2006) も葛 (2015b) も「日本事情」あるいは「日本概況」を教える際の CT の意識を探っているが、それ以外の日本語の授業も含めて CT が文化をどのように教えようとしているかを論じたものは管見の限りない。したがって、日本語の授業における文化的扱いや CT の意識についても調べてみる必要があるだろう。

3. 研究概要

3.1. 研究の目的

本稿では、坪根他 (2014, 2015a, 2015b) で分析したデータを異なる観点から分析することで、この一連の研究の調査協力者である CT10 名について、以下の 2 点を明らかにしたい。

- (1) 日本や日本文化を日本語の授業で取り上げる意義や必要性について、どのような意識を持っているか
- (2) 新人 CT と経験 CT では (1) の意識に違いがあるか

なお、(1) で書いた「日本や日本文化」は、2.2 で取り上げた葛 (2012, 2015a) で分析・考察された『教学大綱』等に示されている異文化コミュニケーション、日本の社会文化、地理、歴史等、また譚 (2006) で CT が教えたいと考えている日本人の考え方や意識、歴史、生活習慣などを念頭に置き、CT の発言データの中で「日本」、「日本文化」と称されたもの、その具体例として挙げられたものを広く取り上げている。

3.2. 研究協力者

調査協力者は、中国の大学で教える教授経験 1 年

以下の新人 CT5 名 (以下、新人 A~E) と同 15 年以上の経験 CT5 名 (以下、経験 F~J) の計 10 名。協力者の背景は、表 1 の通りである。

表 1. 調査協力者一覧

協力者	年齢(歳)	性別	日本語教育歴	日本留学歴
新人 CT	A 26~30	女	7か月	4年4か月
	B 26~30	女	6か月	5年6か月
	C 36~40	女	6か月	6年
	D 26~30	女	6か月	1年
	E 31~35	女	1年	8年4か月
経験 CT	F 46~50	女	16年5か月	7年6か月
	G 56~60	女	32年	3年
	H 51~55	男	24年	5年
	I 51~55	女	29年	6か月
	J 46~50	女	25年	2か月

3.3. 調査方法

調査では 2011 年 2 月～2012 年 2 月に、内藤 (2002) に従い、「いい日本語教師」に関する PAC (Personal Attitude Construct) 分析を実施した。PAC 分析を採用したのは、協力者が刺激文からイメージする連想語を基にしてインタビューを行うため、通常のインタビューよりも個人の内面に迫りやすく、本人にも無意識の事象を引き出し、その意識の背後にあるものも引き出せる可能性があると考えたためである。協力者に自由連想を促すために、一連の研究で筆者らが使用した刺激文 (日本語) は次の通りである。

<刺激文>

あなたにとって「いい中国人日本語教師」とはどんな教師ですか。その教師は教室内外でどんな振る舞いをすると思いますか。また、あなたは、その教師に対してどんな気持ちを持つでしょうか。それから、その教師は日本語教育についてどんなことを考えていると思いますか。

そういうことを含めてあなたが「いい日本語教師」という言葉を聞いて思い浮かべるキーワードやイメージを自由に書いてください。

キーワードやイメージは、できるだけ単語で、書いてください。ただし、それが難しい場合はもう少し長く (10 字前後ぐらいまで) なっても構いません。

刺激文は、単に授業中の教師の態度・行動等について尋ねるだけでなく、授業外の学習者への配慮や同僚との関わりなども含め、幅広く様々な側面を想起してもらうことを意図してこのように作成した。日本語非母語話者であることを考慮し、連想語記入の際は、辞書の使用も可とした。新人 CT、経験 CT とも、2名ずつ計4名が辞書を使用した。

連想語同士のイメージの近さを数値化した非類似度行列を統計処理した結果は、デンドログラムと呼ばれる図になる（<付録>1と2にデンドログラムと非類似度評定の例を示した）。インタビュー開始時にデンドログラムを提示し、連想語のまとまり（クラスター）を協力者に相談・確認した。確認を得たクラスターと各連想語についてインタビューを進めていくが、今回の協力者のインタビューは約1時間半から3時間であった。協力者10名の連想語とク

ラスターは<付録>3を参照のこと。

PAC分析のインタビューで語られたCTの発話は、協力者の許可を得た上で録音し、全て文字起こしをした。本研究では、この発話データから「日本、日本文化に対する意識」に関係のある発話を抜き出し、分析した。

4. 分析結果

分析の結果、経験 CT1名を除いて、9名から日本や日本文化を授業で取り上げる意義や必要性が語られていることがわかった。また、10名のCTの日本や日本文化の位置づけや目的についての言及は、7種類抽出することができ、新人 CTと経験 CTの意識に見られる共通点と相違点は表2のように整理することができた。

表2. 日本、日本文化に関する意識（○は言及した教師）

	新人 CT					経験 CT				
	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J
(1) 日本語の理解に不可欠	○			○		○			○	○
(2) 教師に必要な知識	○		○				○		○	○
(3) 将来の仕事や日本人との交流に役立つ	○	○	○	○		○				○
(4) 面白い授業、動機付けにつながる	○	○	○				○			○
(5) 教師の知識は学習者に影響がある	○	○	○			○				
(6) 両国関係が理解、改善できる	○	○	○	○						
(7) 学習者の視野を広げる			○	○	○					

まず、新人 CTと経験 CTの意識を比較してみると、経験 CTに比べ、新人 CTの方がより多くの観点から日本や日本文化について語っていることがわかる。7種類に整理した意識のうち、(1)文化は日本語の理解に不可欠、(2)日本や日本文化についての知識は教師に必要、(3)日本や日本文化は、将来の仕事や日本人との交流に役立つ、(4)日本や日本文化を取り上げると、授業が面白くなり、学習者の動機付けにつながる、という意識は、経験 CTにも新人 CTにも複数名に見られた。

一方、新人 CTに特徴的に見られたのは、次の3点であった。

(5)教師が日本や日本文化への知識を持っていることは学習者に対して影響がある。つまり、学習者が教師を尊敬、信頼するようになり、教師の話を聞いて納得したり、授業に満足を感じたりするようになる。

(6)学習者が中国と日本の関係を理解したり、将来、両国関係を改善したりできると期待している。教師は学習者のために自分自身の日本体験や直接見聞きした日本の情報を伝えたいと考えており、自分も両国の架け橋になることを期待している。

(7)学習者が日本や日本文化を知ることで、視野

を広げ、社会や世界と自分をつなげて考えるようになる。

しかし、同じ観点の意識を持っているとしても、その具体的な内容や背景も同じなのだろうか。また、新人 CT はどのような背景から経験 CT とは異なる意識を持つようになったのだろうか。以下では、それを探るために CT の発言を詳しく見て、その背景とそこからうかがわれる意識を指摘したい。

(1) 日本語の理解に不可欠

新人 CT も経験 CT も、中国語の直訳や文法的な説明だけでは、日本語が理解できないことがあります。実際に使用される日本語の理解には、ことばの背景にある文化を知ることが必要だと述べている。また、授業で文化的な内容を補足することの重要さだけでなく、それが教師の直接体験であることにも意義があると述べている。新人 CT は、特に、年齢が近い自分の日本での経験を、学習者は聞きたがっていると考えている。

新人 A: …この教科書、ほんとに、もう日本の、あの、実用的な日本語はたくさんあるんですけどでも、こんな実用的な日本語は、直接に中国語で考えるとおかしい部分がたくさんありますから、もうそこの部分も含めて、この教科書には、文法だけ説明しているんですけど、でもその奥に、あの、隠されてる、あの、日本の文化も、もう生徒に教えたほうがいいと思います。これがやっぱり日本に行って直接、日本人と接して、もういろいろ感じて、自分の理解を含めて、教えたたら、あの、効果がいいと思います。あと、あのー、多分私は、あの今の教える、あの、学生たちと、年齢と、近いですから、もう自分が日本で勉強したこと、そして最も、学生たちがあの、聞きたいのは、あの、アドバイス、あー、アルバイトの、経験です。日本ではどんな、アルバイトをしましたか、とか、アルバイトする時は、あのー、どんな人と会いましたかとか、いろいろ、あの、質問がありまして…

経験 J: うーん、そうですね。あのー、例えば、あの文法、あのー、文法と言いますと、あのー、文化的事情と、あまり関係がないと思われますけれど、実は本当に深く関わっています。あの、文化的な、その、背景知識がなければ、文法表現、が、よく理解

できないこと、しょっちゅうあります。うん。例えば、あのー、えっとー、何か意思表現の、その、たい、ですが、あのー、えっとー、相手に聞く時、特に目上の人、尊敬すべき、人、には、えーと例えばあの、何か、えーと、ジュース飲みたいですかって、聞くと失礼なことですね、うん。こういうようなこと、これは文化的な、うん、背景知識がなければ、ほんとに理解できないんですね。

(2) 教師に必要な知識

日本や日本文化に関する知識は、日本語教師に必要なもの、持っているべき知識という認識が新人 CT、経験 CT の双方に見られる。辞書の訳だけでは不十分だと考えていることがわかる。特に、新人 CT は教師にとって、日本に関する知識や理解を深めるために、日本経験はぜひ必要なものだと述べている。

新人 C: うーん、やっぱり先生の素質について、やっぱり日本語を教える時、もちろん、日本についてちし、知識の、面も広いほうがいいですね。特に日本の文化に、自分の国の文化に、詳しい、ことはすごく大切だと思います。

新人 C は、日本と比較するために、中国社会や文化、歴史の知識も必要だと述べている。また、経験 G は、文化の内容はここでは語っていないが、文化知識を教師にとって「一番大事」、「根本的」のような重みのある表現を使って語っている。

経験 J: 言語知識と文化理解。…えーと、日本語教師の、ぶん、言語知識と、文化理解、は、えー、日本語教師、日本語教師の、何でしょう、日本語教師の、日本語教師にとって、一番大事なこと、根本的な、何か。

(3) 将来の仕事や日本人との交流に役立つ

CT は、日本や日本人についての知識が日本人との交流に役立つと話している。経験 CT には、日本語学科の卒業生の進路として、日本人と働くことを意識している教師もおり、そのための準備をするのが教師の役割だと考えている。新人 CT、経験 CT とも、就職には、日本語だけでなく、社会や経済、貿易などの専門知識も必要だと述べている。

新人 B: やっぱりあの、ま初めて、日本に行くと、まあいろんな外国人はまあ、ただなん、えー、私は、これこれが知りたい、あのーこれ、まあこれこれを見たいと思うだけで、特に日本人がどういう考え方をしているのかを理解しようとしているんですね。ただ、ああ、私こういう、あの、日本、日本人のやり方、を知りたいとか、うーん、まあ日本人の考え方を、を知った上で、それで日本人の角度から物事を考え、て、初めてあの日本人と、心、的な交流ができるようになります。

経験 F: んーやはりうちの学生って日本語学科の学生って、将来日本と関係のある仕事をすると思うんですね。でー、ま言ってみれば日中間で動く人たちなわけで、でーあの日本人、日本の社会、人、と接する人なので、そういうのを今の、やはり日本語学科っていうのは日本語専門ですから、あのーそういう、のをですね、そのー先生の授業の中で、伝えていかなければいけないと思いますね。

(4) 面白い授業、動機付けにつながる

新人 CT も経験 CT も、日本語の教科書が言語知識偏重になっていて、学習者にとって必ずしも面白いものではないことを認めた上で、日本文化を扱うことが動機付けにつながると考えている。文化は授業の「面白いネタ」、気軽な話題として有効であると考えていることがうかがわれた。その背景として、学習者は、実際の日本や実際に使われている日本語に興味を持っていること、授業では、音読や暗唱など厳しくてプレッシャーが大きいが、その一方で、新人 CT は、リラックスのためにインターネットや多様なメディアを利用して日本について紹介していくことがわかった。面白い授業につながる具体的な日本文化の例として、生活文化（女子社員の制服、化粧、エスカレーターの乗り方）、伝統文化（茶道、生け花、地方によって異なる年中行事、祭り）、バブル経済などの社会現象、その他に朝以外にも使われる「おはようございます」などの実際の日本語使用に関する情報など多岐にわたるもののが挙げられた。

経験 J: 今までの教科書は、ほとんど文法ヘンジュウ、うーん、あのー、教科書自身はほんとにつまらない

ものばかりです。うん。あの、読んでいるうちに眠くなる。うん、そういうような教科書です。うん。あのー、えー、私あの、えー、日本文化について日本語についてあんまり知らないんですけど、自分の授業で、できるだけ、あのー、例えば何か、えーと、ことば、単語を教える時、えーとその単語の中に、日本文化、日本文化に何か、関連のあるもの、いうようなものがあれば、必ず、その背景事情などを調べて、あの、もし何か関連の、面白い話があれば、必ずそれを、あの、授業に、あのー、えーと、学生に、話したり、教えたり、言うようにしています。

新人 A: …私は、そうだあのー、ある日、うーん、えーと、日本人は手帳を使うから、(笑) そういう、特にあの、家庭主婦は、家計簿、というものを使いますよって、っていう、あの、話になってて、で、すぐインターネットで、か、家計簿、を入れて探したら、いろいろ出てきました。<中略>それで、あまり中国では家計簿を使ってない人が多いんですね。うん、だからそういう、あの、文化の違いとか、あの、習慣の違い、はあの、すぐにインターネットで、見せる、もう直感的に、その違いを見られるようになると、授業が面白くなるんです。

日本や日本文化が面白い授業や動機付けにつながるという意味でも、新人 CT は、紹介する日本のエピソードが教師自身の体験だとさらに効果的だと語っている。

新人 A: …日本語、単語とか文法を説明するよりは、するよりは、するよりは、そうですね、日本人はこういうふうに言いますよ、とか、日本人は実は、あのー、本当の日常生活では、こういうふうに日本語を使いますよ、とかを、説明、すると、あのー、生徒が、まあ納得、できる、生徒がまあ理解してくれる、って感じました。えーと、そうですね、「異文化ができる」(注、A の連想語) というの、例えばいろんな、えーと、うーん、ことでもそうですが、うーん、違う、言い方があるんですね、日本と中国では。だからそういう部分、先生としてはわからないと、生徒がもっとわからなくなる。まあ、先生が、わかってて、うーん、何て言つたらいいのかな。私の場合は、ま、日本で、日本にいて初めてわかったことを、あのー、生徒に、うん、ま、話す時はとても興味深く聞いてくれます。

(5) 教師の知識は学習者に影響がある

新人 CT はいずれも長期の留学経験があり、日本

文化や日本人の言語使用とその背後にある考え方を自身で発見した経験を持っていた。ビリーフとして、日本に行って、体験してわかったことを伝えたい、日本に滞在しないとわからないことがある、それを学習者に伝えられることが自らの強みだという認識が見られた。また、新人 CT は、学習者と同じ中国人である教師の直接体験が、学習者に対する説得力を高めたり、信頼や尊敬などを得ることにつながるとしている。さらに、教師が持っている日本に対する好意や日本語学習に対する熱意も学習者に影響を与えると考えている。その背景には、日本での体験談を話すと学習者が納得し、理解すること、全ての学習者が留学できるわけではないし、教師の中にも長い日本経験がある者は多くないという現実がある。経験 CT の中では、このように語っていたのは、経験 F だけで、同じように留学経験の長い G, H には新人 CT のような意識が見られなかった。そこから、留学期間の長さだけでなく、留学後間もないことがこの意識につながりやすいことが推測される。

新人 A: まあ生徒に、羨ましいと思わせる、のは、日本語が上手だけ、じゃなくて、例えば下に書いてある、ま、「日本に行ったことがある」とか、日本で経験したことを、日本で、えー、会った人とか、日本で見た、中国と違うことを生徒と、あのー、話したりして、そういう分でも、そういう分でも、生徒が、あーいいなと、思うようになるかもしれません。うん。だから、日本語以外には、多分日本での体験、日本での、本当に会った人、本当にあの、自分がやった人、本当にここが違うな思った人、が、生徒が、あの、聞きたいんですね。って授業で、あの、感じました。

新人 B: と、これは、え、やっぱり自分が、あ日本語教師として、日本という国を知っていて、ま自分からあのー、ま、日本という国が好きになって、それであのー、ま自分が、日本の、日本に対する、まあ、熱意を、あの学生に伝えて、まあそういう日本語が好きじゃなければ、ま自分の熱意も学生に伝え、られないから、あのーそれがまあ日本、のことをよく知った上で、日本の文化とか、社会の習慣とかを知って、日本が好きになって、初めてあの、まあ学生に、まあ自分の、ま日本に対するあの、えっと、好きな気持ちを伝えて、日本、ま学生も日本語が、日

本が好きになって日本語を、まもっと、勉強したい、日本語をがんばって勉強したいとう気持ちに、させる、ことかなと思います。

新人 C: …その、どのように客観的に、その、事實を伝えるか。もし中国人の先生の場合は、日本に行かない、生活しないとやっぱり難しいです。単に、テキストの中で、考えできないですね。知識面だけ。うん。生々しいの事例を出して、自分の体験したことを、教えたら一番、説得力があります。

学習者にとって、同国人であり、自分と同じように日本語学習者であった経験を持つ CT が、外国人として日本で経験し、発見したこと、理解したことに対して、憧れや敬意を感じたり、より深く納得したりすると新人 CT は考えている。その時に、日本について何を選んで語るか、またどのように語るかも、前述の家計簿や手帳の例の他にも、駅のホームで立つのは、日本では線の内側だが、中国では外側と言う等、NT とは違う視点が感じられるエピソードが新人 CT からはいくつも語られた。

(6) 両国関係を理解し、将来、改善できる

新人 CT の意識には、学習者には日本に対する誤解があるので、正しい歴史認識を伝えたい、自国(中国)についても客観的に見る目を持たせ、日本語学習を通して、自分の考えを持ち、考える力を育てたいというものがあった。その背景には、学習者は必ずしも日本語学科を志望して大学に入学したわけではなかったり、他人に「日本語を学んでいる」と言いにくい社会環境や、CT が日本で見た実際の日本とは異なると感じられるマスコミの報道、個人の交流を通して相互理解できた日本での経験などを持っていることがある。

新人 A は、歴史的、政治的、社会的背景を認識した上で、日本語を学んでいると他人に言いにくいと感じている学習者に、日本語学習の意義を伝えたいと語っている。

新人 A: 特に、あの政治の、何ですか、政治の面では、あの、い、いろいろ、わからないこともあります、

まあ、こういう歴史がありますから。だから特に、中国では、こういう正しい、中国のあの、日本人教師としては、正しい、あのー、歴史観を、持たないと、まあ、そうですね、私が一番、感じたのは、私もそうでしたけど、私の時も、やっぱり日本語学部に入るのは、ちょっと、あのー、人に言う時は、うーん、ちょっと言いにくいんですね。(笑) 何を習っていますとか、って聞かれる時は、その時は、わざ、わざ、外国語ですって言うんで、あまり日本語ですって堂々と言えないんです。

新人 B は、マスコミの報道から受けるイメージによって国同士の関係はよくないが、個人の交流では、いい関係を作ることができると話している。

新人 B : …大体あの、お互いの国民は、ま、直接的な交流は、なかなかないんですね。大体、あの新聞とか、あのメディアからマスコミの、ま報道によって、そういうイメージを受け入れるんですけど、までも実際に人ととの付き合いは、そういうようなニュース、ニュースとかで報道されることと、違う、違うんですから。まったく政治的な、あの、まあ、ことがなくて、まあただの民間の、まあ個人と個人の交流になるから、ますごく簡単になります。

新人 C : …やっぱり、学生、学生たちは、日本に対して、誤解もある人も、やっぱりいますね。うん。何とか感じています。直接言わないでけれども。表情とか。何とか、感じています。でも、先生としては、うん、先生としてはやっぱり、日本と中国の、友好の架け橋だと思います。その、どのように客観的に、その、事実を伝えるか。もし中国人の先生の場合は、日本に行かないと、生活しないとやっぱり難しいです。単に、テキストの中で、考えきりません。知識面だけ。うん。生々しいの事例を出して、自分の体験したことを、教えたら一番、説得力があります。

新人 CT のこれらのような発言は、経験 CT からは聞かれなかった。教室の外の社会で日本がどのように受け止められているか、そのような環境の中で日本語を学んでいる学習者への配慮、さらには日本や日本人に対する否定的な情報に対する批判的な見方や問い合わせは、新人 CT5 人中、4 人の語りの中に見られた。

(7) 学習者の視野を広げる

日本について学ぶことが日本についての知識を得ることにとどまらず、学習者の視野を広げることにつながるという発言は、新人 CT に特徴的だった。新人 CT は、学習者がみな日本に留学できるわけではないので、自分の目で見た日本や日本文化を伝えたいと考え、最近の学習者が他人にあまり関心を持っていない様子を危惧していることなどを語っている。

新人 D : はい、「日本通」(注、D の連想語) はあの、授業の中で、よくあの、日本文化に関するものが出ていて、もー、を、それがわかつたら、学生たちに、あのいろんなものが説明できて、学生の視野も、広げ、られますし、はい。あのー、学生みんなが日本に、留学、することができる、わけではないですか、はい。はい。あのー私の目で見た日本を学生に伝えたい気持ちです。はい。

日本に関して経験を伴った知識を豊富に持っていることを新人 D は「日本通」と表現し、「いい教師」の条件として挙げている。新人 E は、日本や日本語学習を通して、他の学習者と学び合い、考える力を育てたいと話している。この教師は、同じインタビューの中で中国や世界の状況も調べて、考えて、話し合ったり、自分はこれからどうすればいいのか、教師も一緒に考えていきたいとも話している。

新人 E : 中国の学生、って、あんまり他人、何ていうの、他人の話に興味関心のない人が多くて、<中略>ちょっとには、日本と比、べて、中国の社会全体がちょっと落ち着かない感じがするんですけど、<中略>一緒に何か勉強する、考えていく、学び合っていくという、部分についてすごく、何というの、あの、ちょっと、育てる必要があるというか、気づいてもらいたい、ところです。はい。

新人 E のこのような意識は、他の新人 CT、経験 CT の中には見られない。(1) の日本文化の例で示したように、他の CT たちは、日本文化を「日本についての知識」、特に中国や中国人とは異なるものと見てている。新人 E には、日本語を理解するために日

本や日本文化を伝えるというよりは、日本語学習を通して、中国以外の国々にも目を向け、広い社会の中でこれからどう生きるかを教師も共に考えたいと話している。そして、どう生きるかの問いには教師である自分自身も答えを持っているわけではないと語っていた。

5. 考察

本研究の調査協力者である CT が日本や日本文化を取り上げる目的は、日本語の背景知識、日本人との交流、両国関係の理解や改善、学習者の視野の拡大、さらには、授業の動機付けなど多岐にわたっていた。ただし、新人 CT、経験 CT を問わず、その取り上げ方は、説明、紹介ということばがよく使われ、教師の日本での体験談を含め、多くが知識や情報のレベルで語られている。つまり、日本文化が知識として教師の側から一方的に伝授されていたという葛 (2015b) や譚 (2006) の指摘と同様の傾向が見てとれる。

しかし、新人 CT と経験 CT を比べてみると、新人 CT には、知識や情報レベルを超えた文化観の広がりのきざしも感じられる。新人 CT には、文化を通じて異なる思考や価値観を知り、視野を広げることや、自分の社会にある言説を見直そうという態度が見られ、体験談を重視したり中国と日本の関係に配慮する語りに特徴が見られたからである。新人 CT がそのような意識を持つ背景には、新人 CT が、両国関係が複雑化する中で日本留学または帰国間もない時期を過ごしていることがある可能性が考えられる。

一方、経験 CT の中には、日本語の授業の中で学習者に課題を与え、発表するなど、考えさせたり主体性を養う活動を取り入れていると語る者が複数名いた (坪根他 2015b)。このような経験 CT の授業活動が、文化学習にも取り入れられれば、譚 (2006) や葛 (2015b) で課題とされたような一方的な知識伝授にとどまらない文化の授業につながる可能性がある。

ある。

これらのことは、文化観の広がりの見られる新人 CT と、学習者に考えさせ主体性を養う活動を取り入れている経験 CT とが、互いに協力、協働することで、学習者にとってよりよい文化学習へと発展する可能性があることを示唆している。

また、本研究では、日本や日本文化を扱う際の CT (NNT) の役割と NT との協働についても新たな視点を示唆している。CT が文化を扱う利点は、葛 (2015b) で提案されたような、学習者の母語で説明できることだけではない。CT は、学習者にとって、何が日本語理解の障害になるか、何が面白いと感じられ、動機付けにつながるか、学習者と共に視点で考えることができる。CT 自身も、学習者が CT の経験を聞くことで理解が深まったり、納得したりする、と自らの役割を認識していた。CT の視点から、日本や日本文化を取り上げる意義として、両国の関係改善への思いや学習者の将来への配慮も聞かれた。本研究の協力者 10 名からは、NT との協働に関する発言はなかったが、今回の刺激語が「いい CT とは」であったこととも関係があるかもしれない。しかし、本稿での分析から、NT との協働について次のような可能性が考えられる。つまり、協働の場では、異なる背景を持つ NNT と NT が学習者にとって日本や日本文化のリソースになることに利点があるということ、NNT が語る日本、NT が語る日本があり、それぞれ複数の教師が語ることは、学習者にとって多角的な、豊かなリソースになり得るということである。

上記に関連して、CT 自身の直接体験の重要性が複数の CT から語られたことにも着目したい。今回協力者となった新人 CT は、全員が長期の日本滞在経験を持ち、その時の自分の経験を教える際の大きな強みと感じていた。CT を対象とした訪日研修の実施の際には、どのような日本体験の場を作り、教育現場に、リソースも含めて何を持ち帰るか、それをどう授業で扱うかを考えることの必要性が浮かび

上がってきたと言える。

6. まとめと今後の課題

10名の調査協力者のうち、9名は、日本語教育の場において日本や日本文化を必要なもの、取り上げるべきものと考えていたことがわかった。その背景には、言語知識の獲得を目的として、文法説明と練習を中心とした授業が一般的な中国の大学の日本語教育の現状があり、調査協力者のCTは文化的な情報が実際の日本語使用について理解を深めるために不可欠だと考えたり、学習者の興味や関心を引いたりするために利用していた。また、その取り上げ方は、教師の経験談を含めた紹介や説明によるものがほとんどだった。取り上げる意義や必要性には、新人CTと経験CTの間で違いが見られ、新人CTは、自身の日本での経験談が教師に対する尊敬や学習者の動機付けにつながることや、中国と日本の両国関係の理解や改善に結びつく可能性があること、学習者の視野を広めるために有効だと強く感じていた。その理由として、新人CTは学習者との年齢の近さから、自分を見る学習者の視点を意識していることや、留学中の日本経験や帰国後の中国での日本報道とのギャップを最近の経験として持っていることが推測される。

本稿では、CT10名について分析を行ったが、CTの実態を把握するには、このような事例研究をさらに進めることが必要である。また、新人・経験といった分類だけでなく、留学経験の有無のような属性、期間の長さや留学時の経験といった教師個人の属性や留学当時の国内・国際情勢にも注目し、丁寧に見ていくことが重要であろう。本研究グループで教師のビリーフを調査している国には、中国の他に、タイ、韓国がある。今後、こうした国でのNNTの日本や日本文化に対する意識の観点からもデータを見ていきたい。

さらに、前述のように日本や日本文化紹介については、NTとの協働の可能性も大きい。NTが伝え

たい内容、NTが持つ意識についても調査を行えば、協働がよりよいものになるよう、また協働の場での相互理解に寄与する知見が提供できるのではないかと考える。

注

- (1) 2012年に国際交流基金が行った調査によると、中国における日本語学習者約105万人のうち、高等教育の学習者数は68万人で(国際交流基金2013)、国別で見ても、高等教育に限った数としても、世界で最も多い。一方、日本国内の留学生のうち、中国からの留学生数は約9万4千人で、出身国別では最も多い(日本学生支援機構2015)。
- (2) 本稿ではビリーフを、教師が「言語学習の方法・効果などについて自覚的または無自覚的にもつている信念や確信」(日本語教育学会2005, pp.807-808)とする。
- (3) 日本語専攻課程については、四年制大学の前半2年を対象とする『大学日本語専攻基礎段階教学大綱』(2001年に改訂)と、後半2年を対象とする『大学日本語専攻高学年段階教学大綱』(2000年に改訂)の二つがある。
- (4) 『教学大綱』は注(3)にあるように2000年及び2001年に改訂されており、その元となる指針は、1998年に出された『21世紀に向かう外国語専攻本科教育改革についての若干の意見』(原題は中国語)という文書に示されている。
- (5) バイラム(Byram1997)が主張する異文化間コミュニケーション能力の構成要素は以下の通りである。(バイラム2015, pp.74-75より)
 - ・態度 **Attitudes**: 好奇心、開放性、他の文化についての疑惑と自己の文化についての信条を保留しておく意向がある
 - ・知識 **Knowledge**: 社会的集団について、自国と相手の出身国での産物と習慣、社会的なまたは個人同士の相互交流の一般的な過程に関するもの
 - ・解釈と関連付けのスキル **Skills of interpreting and relation**: 他文化の文書や出来事を解釈、説明し、自国の文書や出来事にそれらを関連付ける能力
 - ・発見と相互交流のスキル **Skills of discovery and interaction**: ある文化とその文化の習慣についての新しい知識を習得する能力、リアルタイムでコミュニケーションと相互交流を行うという制約のもとで、知識、態度、スキルをうまく操作する能力
 - ・クリティカルな文化意識、政治教育 **Critical cultural awareness/political education**: 自己の文化や国、他の文化や国における物の見

方、行動、産物に対し、クリティカルにかつ明確な基準に基づいて判断を下す能力

- (6) 譚(2006)では、中国全国の24大学を対象に調査を実施し、20大学から回答を得ている。譚は、20大学の「日本事情」のクラスでは、中国で出版された9種類の教科書が使用されているとした上で、教科書に記載がある項目、回答者である教師が取り上げたい項目についてまとめている。

付記

本研究は、平成21-24年度科学研究費補助金（基盤研究(C)「量的・質的ビリーフ研究から海外ノンネイティブ日本語教師の研修に必要なものを探る」（研究代表者：坪根由香里、課題番号 21520549）の取り組みの一部である。また、本稿は、2014年7月11日にオーストラリアのシドニーで開催された日本語教育国際研究大会での口頭発表「いい日本語教師」に関する中国人新人教師のビリーフの特徴—日本、日本文化に対する意識を中心に—（八田直美・小澤伊久美・坪根由香里）を元に、大幅に加筆修正したものである。

参考文献

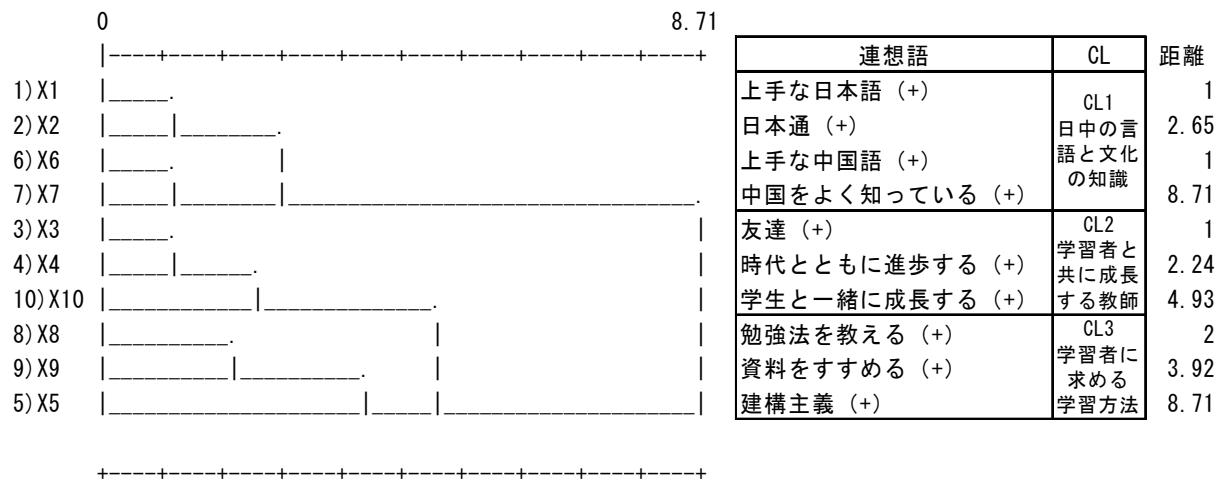
- 葛茜 (2012) 「中国の大学の日本語専攻教育は何を目指しているか—『教学大綱』の分析から」『日本語・日本学研究』第2号, pp.33-45
- 葛茜 (2015a) 「中国の大学日本語専攻教育における教育理念の意味づけと問題点—言語教育政策の分析を中心に—」『日本語研究教育年報』19, pp.1-18
- 葛茜 (2015b) 「中国の大学日本語専攻教育における文化教育の実態とその課題—「日本概況」という授業を中心に—」『早稲田日本語教育学』第17号, pp.21-29
- 国際交流基金 (2013) 『海外の日本語教育の現状—2012年度日本語教育機関調査より—』くろしお出版
- 佐々木倫子 (2002) 「日本語教育で重視される文化概念」細川英雄編『ことばと文化を結ぶ日本語教育』凡人社, pp.218-234
- 周静 (2012) 「異文化間コミュニケーション能力から見た中国の日本語教育」（京都大学大学院修士論文）http://www.flae.h.kyoto-u.ac.jp/13_Shu_Master.pdf (2016年12月26日参照)
- 譚建川 (2006) 「中国における「日本事情」教育の現状」『日本言語文化研究会論集』第2号, 政策研究大学院大学, pp.59-81
- 坪根由香里・小澤伊久美・嶽肩志江 (2014) 「中国人経験日本語教師の「対学習者」ビリーフとその背景を探る—「いい日本語教師」に関するPAC分析の結果から—」『大阪観光大学紀要』第14号, pp.59-68
- 坪根由香里・嶽肩志江・小澤伊久美・八田直美 (2015a) 「「いい日本語教師」に関する中国人新人教師のビリーフ—PAC分析の結果から—」『大阪観光大学紀要』第15号, pp.33-42
- 坪根由香里・嶽肩志江・小澤伊久美・八田直美 (2015b) 「中国人新人・経験日本語教師の「いい日本語教師」に関するビリーフ—PAC分析の結果に見られる共通点と相違点—」『第24回小出記念日本語教育研究会予稿集』, pp.30-31
- 坪根由香里・小澤伊久美・嶽肩志江・八田直美 (2016) 「「実践的な日本語」「考えさせる授業」を意識する中国人日本語教師—その背景と彼らが目指す授業—」『大阪観光大学紀要』第16号, pp.33-42
- 内藤哲雄(2002)『PAC分析実施法入門[改訂版]』ナカニシヤ出版
- 日本学生支援機構 (2015) 「平成27年度外国人留学生在籍状況調査結果」http://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student_e/2015/index.html (2016年12月26日参照)
- 日本語教育学会 (2005) 『新版 日本語教育事典』大修館書店
- バイラム,マイケル (2015) 『相互文化的能力を育む外国語教育—グローバル時代の市民性形成をめざして—』, 細川英雄監修, 山田悦子・古村由美子訳, 大修館書店
- Byram, Michael (1997) *Teaching and Assessing Intercultural Communicative Competence*. Multilingual Matters Ltd.

付録

1. デンドログラム（新人Dの例）

- 左端の数字は協力者が付けた連想語の重要度番号, CLはクラスター（連想語のまとまり）の略である。
- 連想語の後ろの (+), (-), (0) は、インタビュー終了後に協力者に尋ねた各項目のイメージで、インタビュー時に協力者に提示したデンドログラムには記載されていない。

【クラスター分析 ---- 基準：ウォード法】



2. 非類似度評定結果（新人Dの例）

- 1) ~10) は協力者の連想語、数字は重要度順を表す。
- 2つの連想語の距離（イメージや内容的な近さ）を協力者に1から7で答えてもらう。

	1)	2)	3)	4)	5)	6)	7)	8)	9)	10)
1)										
2)	1									
3)	3	5								
4)	4	3	1							
5)	3	4	4	2						
6)	2	2	4	6	5					
7)	2	2	4	6	5	1				
8)	5	4	3	3	3	4	4			
9)	5	4	3	4	4	4	4	2		
10)	6	6	2	2	4	5	5	4	4	

3. 連想語とクラスター

クラスター (CL) の名前は協力者にも尋ねているが、以下の名付けは筆者らが行った。

(1) 新人教師 A~E

	連想語	クラスター	連想語	クラスター
新人 A	日本語が上手(+) 発音がきれい(+) 流暢(+) 羨しい(+) おもしろい(+) 興味を持たせる(+) 活発(+) 異文化が理解できる(+) 日本に行ったことがある(+) 日本語が好き(0) 人脈が広い(+) 正しい歴史観(+) 謙遜(0) 責任感(+) 生徒を励ます(+) 丁寧(+) やさしい(+) まじめ(0) 授業できびしい(+) 公平(+)	CL1 日本語の能力 CL2 授業を面白くする工夫 CL3 異文化理解 CL4 教師の態度	発音がきれい(+) 感心(+) 好き(+) 関心(+) 丁寧な説明(+) 指導をもらいたい(+) 会いたい(+) 効果(実績)(+) 面白い(+) 雰囲気(0) ユーモア(+) 笑顔(+) 魅力的(+) いきいき(+) 知識面(+) 文化に詳しい(+) 尊敬(+) 自信(+) 熟意(+) 思いやり(+) 例文(+) 教え方(+) わかりやすく(+) 実物を見せる(+) 楽しい(+) 友達(+) 公平(+) 友好(+) 互いに理解(+) 宣伝する(+) 國際社会(+)	CL1 知識があり、面白い授業のできる魅力的な教師 CL2 わかりやすい教え方と学生への思いやり CL3 学習者への態度と日本理解
	日本好きの教師(+) 日本人の考え方を理解する(+) 日本各地の風習を知る(+) 好奇心(+) 日本滞在経験あり(+) 中国にないものをよく発見できる(+) 教育に対する熱意を持つ(+) よくしゃべる(+) おもしろい先生(+) 会話力(+) 感情をこめて会話文を読む(+) 発音がきれい(+) 日中対照で文法を説明できる(+) 中国語レベルがいい(+) 学生に誠実(+)	CL1 日本への好意と理解 CL2 会話力と熱意のある面白い教師 CL3 教師の中国語能力		

連想語		クラスター
新人D	上手な日本語(+) 日本通(+) 上手な中国語(+) 中国をよく知っている(+) 友達(+) 時代とともに進歩する(+) 学生と一緒に成長する(+) 勉強法を教える(+) 資料をすすめる(+) 建構主義(+)	CL1 日中の言語と文化の知識
		CL2 学習者とともに成長する教師
		CL3 学習者に求める学習方法
	学生と一緒に生き方を考える教師(+) 考え方を育てる教師(+) 社会の現状について一緒に学び、考える教師(+) 自分の考えを持って意見を出し合うという活動の中で日本語力を育てる教師(+) 他人との学び合いの重要性について気づいてもらう教師(+) 学習者の自律性を育てる教師(+) 学習者のさまざまな可能性を引き出せる教師(+) 学習者の意欲を引き出せる教師(+) 学習者を一人の人間として尊重し、サポートする教師(+) 実践をよりよくするために研究を行うなど考えつづける教師(+)	CL1 教師と学習者がともに考え学ぶ教室活動
新人E	CL2 学習者の自律性	
	CL3 学習者を尊重し動機付ける態度と実践研究	

(2) 経験教師 F~J

連想語		クラスター	連想語	クラスター
経験F	思いやり(教書育人)(+) 勤勉(+) 気楽な雰囲気づくり(授業)(+) 面倒見がいい(+) 学術レベルが高い(+) 表現がわかりやすい(+) 教材以外の新しい知識を取り入れる(+) 会話が流暢である(+)	CL1 魅力的な教師の資質	常に新しい知識を学びたい(+) 専門についての研究に熱心だ(+) 知識が豊富である(+) 異文化のことがよくわかる(+) 日本語とともに日本文化も教える(+) 言葉的、文化的の差異にくわしい(+) 日本文化事情にくわしい(+) 日本語が好きになる(+) 積極的に他の教師とコミュニケーションする(+) 生きた日本語を教えていたい(+) 自然な日本語が話せる(+)	CL1 教師が持るべき言語知識と文化理解
	CL2 理想的な教師の専門性	CL2 専門に対するいい教師の態度や行動	日本語を教えることはたのしみだ(+) 授業をおもしろくやる(+) 常に授業法の工夫をしている(+) 教師中心ではなく、学生主体の日本語教育(+) 学生と活発なやりとりをする(+) 明るい雰囲気を作る(+) 笑い話を上手に利用する(0) 板書が少ない(0) ずっと教壇に立たず、教室中をまわる(0)	CL2 理想的な教師の教育への態度や行動
	CL3 いい教師として目指す日本語能力	CL3 いい教師の日本語能力	CL3 研究に対する熱意	CL3 理想的な教師の学習者に対する態度
	CL1 日本語能力向上への熱意	CL1 研究に対する熱意	CL1 日本語で仕事ができる人材を育成するための支援者	CL1 日本語で仕事ができる人材を育成するための支援者
経験G	日本語を正しく使う(+) 真面目な人(+) 学生に教える態度はやさしい、でもきびしく要求する(+) 親切に教える(+) 日本のことよく知っている(+) 勉強に励む(+) 日本に興味を持つ(+) 発音がきれい(+)	CL1 いい教師の資質と学生に対する行動	CL1 いい教師の日本語能力	CL1 いい教師の日本語能力
	CL2 専門に対するいい教師の態度や行動	CL2 専門に対するいい教師の態度や行動	CL2 研究に対する熱意	CL2 研究に対する熱意
	CL3 いい教師の日本語能力	CL3 いい教師の日本語能力	CL3 学生に対する愛情	CL3 学生に対する愛情
	CL1 日本語で仕事ができる人材を育成するための支援者	CL1 日本語で仕事ができる人材を育成するための支援者	CL1 日本語で仕事ができる人材を育成するための支援者	CL1 日本語で仕事ができる人材を育成するための支援者
経験H	自分の日本語能力をたかめる熱心さ(+) 通訳(本人が通訳できる)(+) 日本語(+) 翻訳(本人が翻訳できる)(+) 文法(+) 研究の熱心さ(+)	CL1 日本語能力向上への熱意	CL1 日本語で仕事ができる人材を育成するための支援者	CL1 日本語で仕事ができる人材を育成するための支援者
	CL2 研究に対する熱意	CL2 研究に対する熱意	CL2 研究に対する熱意	CL2 研究に対する熱意
	CL3 学生に対する愛情	CL3 学生に対する愛情	CL3 学生に対する愛情	CL3 学生に対する愛情
	CL1 日本語で仕事ができる人材を育成するための支援者	CL1 日本語で仕事ができる人材を育成するための支援者	CL1 日本語で仕事ができる人材を育成するための支援者	CL1 日本語で仕事ができる人材を育成するための支援者
経験I	学生の立場に立ってものごとを考える(+) 学生に納得させる能力(+) 学生を愛する心持(+) よい人材=作品=満足感(+) 日本語を専門とする人材育成(+) 日本語で仕事ができる人を育成する(+) 学習の支援者(+) 情報の提供者(+) 授業の設計者(+) 学習者に信頼してもらえる(+) 学生の相談役(0)	CL2 学習者に対する愛情	CL2 学習者に信頼され、相談される教師	CL2 学習者に信頼され、相談される教師
	CL3 教える内容に興味を持ち、学習者と共に考える	CL3 教える内容に興味を持ち、学習者と共に考える	CL3 教える内容に興味を持ち、学習者と共に考える	CL3 教える内容に興味を持ち、学習者と共に考える
	CL4 ユーモアがあり、進行役としての教師	CL4 ユーモアがあり、進行役としての教師	CL4 ユーモアがあり、進行役としての教師	CL4 ユーモアがあり、進行役としての教師
	CL1 日本語で仕事ができる人材を育成するための支援者	CL1 日本語で仕事ができる人材を育成するための支援者	CL1 日本語で仕事ができる人材を育成するための支援者	CL1 日本語で仕事ができる人材を育成するための支援者